

郷土資料編

昭和四十八年四月二十二日

第五十五回

史跡めぐり資料

(埼玉古墳と前玉神社
行田市のお古墳群)

越谷市郷土研究会

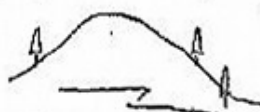
目次

一、埼玉古墳と前玉神社

会員 日置宗一氏…………… 3

二、行田市の古墳群

理事 三原善太郎氏…………… 7



第五十五回 史跡めぐり案内

日時 四月二十二日(日)

午前九時十五分 越谷駅集合

午前九時四十二分発 伊勢崎行準急——羽生にて

のりかえ——行田駅下車 バスにて

県立埼玉資料館前下車 停留所前食堂にて

昼食

見学

〔埼玉資料館
埼玉古墳群〕

行田駅——羽生——越谷駅着(午後五時頃予定)

会費

六〇〇円

他に食堂にての昼食代を御用意下さい

埼玉古墳と前玉神社

越谷郷土研究会

日置宗一

武蔵国のなかでも大きな古墳の最も多く群集しているところは埼玉県行田市埼玉王の古墳であろう。埼玉王という部落は、今でも行田市に編入されているが以前は埼玉群に属する大きな古村で群家の所在地であった。正倉院文書戸籍帳、山城国愛宕郡雲下里計帳、神龜三年（七二六）に前玉郡と記し万葉集には、佐吉多万。延喜式神名帳にもサキタマと訓じている。

今行田市の町はづれから東南北駅に通ずる道を二キロも行くと道の兩側稲田のなかに古墳が疊々と横たわっているのが視野に入ってくる。それらの古墳のうち、主なるものは、左手三百メートルほどに丸墓山と称せられる円墳がある。円墳としては日本でも他に類例を見ない大きな古墳である。（現在では前方後円墳と証明される。）高さ十六メートル、径

一〇メートル、周囲三〇七米ある。頂上は灌木が茂り見晴しが良い。丸墓山の東方三百米のところには將軍山と称せられる前方後円墳がある。この古墳は明治二十七年発掘され石廓を発見されたが石廓は穿孔貝殻の附着した房州石を以て築かれ天井は巨大なる供父石にて蓋をしてあったという。又出土した遺物もおびただしい数にのぼったといわれる。

丸墓山の東南に稻荷山古墳があり先年発掘され山頂の漆器墓形が復元されている。（將軍山古墳出土品と共に出土品は資料館に展示）右手に大きな前方後円墳が堀をめぐらして横たわっている。二子山といわれており全山低い樹林におおわれ完全な原形をとどめている。さらに泉道さ渡ると相對する位置に鉄砲山と称せられる前方後円墳がある。鉄砲山と称せられるわけは、江戸時代に忍戒がこの辺で

砲術演習としていたことがあるからである。鉄砲山の東方百メートル程のところに式内社の前玉神社が鎮座しているが、この前玉神社も社殿が古墳の上に位置しているのである。この古墳は後世いちゞるしく変形され原形をとめていない。

神社宮司の談によればこの古墳はもと前方後円墳であつたらしいとのことである。新編武蔵風土記稿は當時に關して次のように記している。

「社地の様平地の田甫中より突出せる塚にて周りに二町程、高さ三丈余、四方に喬木生い茂り頂上僅か十坪程の平地にして、そこに小社を建つしと。

以上のほか埼玉部落に現存する古墳としては五塚。中の山（今年堀を復元）奥の山、愛宕山、ボツ十山と称せらるものがある。さらに現在はずでに崩壊されて痕跡をとめていないが古墳としての記録の存するものが二十

三あり、そのほか記録に残されず、取り崩された古墳も数多くあつた事であろう。

前玉神社の東南方六、。米ほどのところに「百塚」という地名があり、また遺物の出土された記録もあるがいまは塚らしきものは認められない。

このような武蔵国ないし関東でも珍らしい大規模な古墳郡の存在は、なにを物語るものであろうか。思うに往昔隆盛を極めた国造の何代かにわたる一族を中心とした墳墓であるとしが考えられないのである。

日本古墳文化の発達した地域は九州、畿内、関東であつてなかでも武蔵野の行田はその大きさと数において主たるものである。これは古墳時代は荒川や吉川根川の沿岸には舟による水運がいらけ、稲作に適した高い古代文化が育けていたためである。

武蔵野の歴史時代への発展はこの古墳文化と云われる豪族文化の発展に伴い地域的に村落が崩発されていったところにはじまる。

武蔵野にも農業技術をもつた古代農耕文化

と云われるものが六世紀以後開花したこの文化は、部落地位の豪族の文化とも考えられ、因から伝えられた高度の生治技術を持っていた。それは次第に富と権力をもつ豪族を育て死後を祀る盛土の古墳を残すようなこの社会を成長させていった。この時代の畿内地方にこの豪族の統一者の中から大和朝廷が出来、その勢力が伸びて来た。朝廷は勢力拡大を図るのに在地の豪族と勢力と富の強弱を尺度に^{（たのまきこ）}困造（たのまきこ）又は^{（あたまし）}県主（あたまし）に任命した。一（成務期）武蔵野には当時邪馬志国造（えたまもし）、^{（えたまもし）}兄多毛比命（えたまもし）と、胸刺国造（むねさし）伊佐知造（いさち）とがあつた。元邪志命は荒川を中心に東京の北東部から奥武蔵にかけて発展していた豪族でありこの指導者と見られる一族であり、出雲臣の系統をひく有力な族長で大己貴命を祭神とする大宮氷川神社はこの氏族の氏神であると考えられる。

前玉神社は、埼玉郷の故地の中心に近く鎮座し、延喜式内神名帳の武蔵国埼玉郡四産の中の「前玉二社」とあるのに該当するのが通

説の様である。前玉神社を祀つたものが武蔵国造の一族であつたと云う事は、先ず間違いないことと云わなければなるまい。とすればこの埼玉神社の一座は氷川神のサキヤマを祀つたと云う推測も充分可能であると思われる。前玉神社の祭神二座のうち一座が氷川神社の幸魂を祀つたものであるとして先ず同題としたいのは前玉神社と古墳との関係についてである。

「田島宮司」によれば、もともと神社の社殿も古墳の下にあつたのであるが、近世富士信仰の盛んとなった時に古墳と知らずに小高い山の上に社殿を移して、富士浅間神社を祠つたものであらうと云う。

現在は古墳の中腹に小社があり、祭神として「木花麻耶姫を祀り、浅間社の額が掲げられている。

富士信仰の盛になったのは、近世以降の

ことであるから、過去においての社殿は平地に在り、おそらく古墳を拜祠するような位置にあつたのではないかと想像される。

即ち埼玉神社の一連は、元來この古墳に、葬られた人を崇めてこれを祭つたものと解したいと思われるのである。

引用文献資料

埼玉県地名誌 荻塚一三郎 北辰堂

武蔵国式内社の歴史地理 菱沼 勇 永見社

武蔵野 桜井正信 社会思想社

埼玉人物小事典 小野文雄 埼玉人物
小事典刊行会

埼玉の歴史 小野文雄 世界書院

行田市の古墳郡に想う

越谷市郷土研究会

理事

三原善太郎

見学に於いて私をとらえた素材は

- 一、平野の中の塚……この地帯の標高はどの位たろうか……十七米とパンフレットに見る。
- 二、塚はもり土か……自然の丘陵か、地層断面と土壕又は水壕の有無
- 三、出土品の内容と定説……資料館及プリント
- 四、説明は定説の反唱

一、神社の説明 サキタマの地名のおこり
水運 沼 神社の位置 万葉歌 青石

二、碑銘、奉納額

- 以上各項が私をして此地の全貌を知り度いと云う欲望をかりたてた。主な項目は次の通り
- 一、先住民俗は出雲系 移住民俗は帰化人が主体、為政者の将は帰化系と地方豪族起用
 - 二、地名のサキタマ、サナタマ、サイタマのことはと漢音、文字の因係と経緯
 - 三、六世紀頃の自然条件考察
 - 四、出土品から見て、この地の状況を想定す

- 一、私の根底に横たわるものは、現代人が現状を中心にして古代を観ることは誤謬のもとであるところ、地球学団「自然条件 縦系の」
- 二、漢字に依る「同種同文」は内容的に異なるものが多いため、「漢文読みの中国知らず現地生活のみの中国知らず」は適評と解す
卑弥呼と邪馬台の魏志倭人伝の例横系Ⅰ
- 三、人的条件による自然の変貌……縦系Ⅱ
工事による背景 行政措置……横系Ⅱ
- 四、古代先住民の移動背景（ニニは最終頁で）
 1. 食を求めて
 2. 外敵に備えて
 3. 安住と住居
 4. 住居から衣服
 5. 遊牧から定住
 6. 生産から加工
 7. 個から集団
 8. 集団から行政
- 五、年代と想定 諸学者の見解と伝承
- 六、自己の経験と誤差の理由検討

以上が古墳郡を訪ねて興味深く且つこの記録を記する動機となった。

一 六世紀頃の該地の自然景観

(1) 現在標高十七米と云うことは六世紀約千三百年前に於いて標高四米の平地で現在等高線十三米は海岸線と仮定される。理由説明別に掲ぐ。太平洋側の隆起と日本海側の沈下に依る。縦系の(1)

(2) 標高十七米と四米の海岸線に注ぐ河川の移動はその流域に於ける沼沢、湿地帯が變る面積も當時に比し何倍か広がり、川の上流から流水方向は逆る

(等高線と海洋等深図併用が最もよい)

等高線十三米に赤線を以て画し海岸線とした景観

但是は軸を日本海の最東部とした場合、第一は列島の中央山脈と軸とした場合は標高十米半が海岸線となり、これは東京地下鉄工事の地層確認で私は前者をとる。依って行田地区の江戸湾の入江とか水運の便を思う。船着場のことも或は赤キタマ神社が平地に在ったのが、丘陵の上に移した理由もなげけよう。洪水四米の水壘の時は埋没してしまっただろう。

私はこの自然條件に立って、縦系の人的条件を考へる

通常六世紀説に立っているが私は四世紀前期からの定着(移動着)と考へたい。その理由は水壕(土壕)をめぐらす古墳である。この型式は四世紀に既に見えるし、海岸線と荒川の河口で浸水の恐れも考へるが

二、先住民族の主流は出雲族で移動定着の先駆者

この考へ方は賛成だが、それ以前の自由移民の少数民族のあった事を考へる。(高土人の故在)

(1) 正史から受けとるものと古墳資料から見て

A 丸墓山は麻呂墓山と解される。防人上藤原部等麻呂の碑文(後世に建立)などから

行政は中央の権力がこの地に及んでいるとか明らかである。紀元六九〇年(一、二八

年前)に新羅の帰化人を武威に配置すとあり、

七二六年(神龜三年)三三(三)年(三)前玉郡の名が

正倉院文書戸籍帳や山城国愛宕郡雲下里計

帳に見えるあたりから推定し、又万葉集の

佐喜多乃、延喜式神帳のサキタマ等から

佐喜多乃、延喜式神帳のサキタマ等から

推量すれば、既に麻呂墓山は統治者將の古墳と見ても誤りなからう。

六九。 歸化人（新羅）を武蔵へ配置

七一六。 高麗郡設置

七二二。 良田開墾百方町歩の令を出す

七二六。 前玉郡のせみゆ（前逃）

七三〇。 防人官廢止

七四三。 同墾田は永世私宥法を定め地方

民大いに開墾に力めた。 地方豪族の擧

七六五。 二地私有の禁止令あり

七七二。 百が私有地を認めらる令がある。

○正史に當りて中央の書寫が西京に于て影響を認る。

奈良朝時代の大和北方の國采の語と文化考

一、奈良の語源を見る時初めて朝鮮文化が我が國に及ぼした影響が大きかつたことを知るべきである。奈良朝前期人皇才世六代孝徳天皇大化元年六四五年から四三代元明天皇和銅二年西暦七一九年迄の白鳳時代をさし、後期とは天平時代として和銅三年西暦七一〇年から才五。代延暦二

年七八三年頃をさす約一世紀半にわたる間をさしている。

二、時代背景で世紀中頃（八世紀半）の朝鮮半島の困乱が日本に直接影響している。

即三韓（百濟・新羅・高句麗）の興亡の餘波を受けて、逃亡・重臣遺族の帰化、それに伴う人民の移動が大きな下地を作った時

である。それで一概に中国文化と見るのは早計である。新羅、高句麗で消化されて植

付けられたと見るべきである。

三、例証として奈良の語源をたどれば明らかにならう。

奈良朝鮮古語の「ナラ」で「國」と言う意味である。又「飛鳥」とは「明日香」の語から出ている。

明日香は朝鮮語の「安落」(アンスクヌ)から出ている。

原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

いる。原語「明日香」は飛ぶ鳥即ち外來者が安やかな寝り、睡りに着く宿であった。安住の地を意味する。

例証其の二（大阪）近く平野川が流れている。これはもと百濟川と称れられし所、現在大阪市生野区猪飼野は人口四万以上の朝人（百濟郡）であつた事から押して、民族大移動期を見逃してはなるまい。

◎ カラ天竺のカラは韓で「加羅」から出て支那ではない。漢文化の消化者百濟系が大和地方の中心盛力となつて奈良文化の素地をなしている。

関東地区は 新羅・高句麗 六亡の後余未の地として朝鮮文化を招来した。民族系としては出雲系に属し、大陸系移動の騎馬族である。へ大きく分ければ北方ツングース系の北上した蒙古、扶餘の女眞―北鮮―裏日本（つづく）言語、風俗、習慣等もほぼ同型である。

これが関東に於ける主力であつた。

日本正史の統日本紀に天平宝字二年（西暦の七五八年）八月条に「武威国の用地に移し、「高麗郡」をおく」と病化人処遇であつた。

「人数別」新羅僧三十三人 厄三人 男九人 女二十一人

現在の練馬区を中心に

保谷市

埼玉県朝霞市、新座、足立、大和町

広範園に涉り農耕技術の焼畑法並織物等の技術を伝えた。

この地名は調布市、世田谷区砧町及北多摩の狛江など多摩川の沿線で「八世紀の名残である。砧や調布市の語義は由来を語る。調^{アサギ}は朝廷に麻布を調として出すためにその布を織つた。のが調布の名。又布を水にさらし木又は石の台の上で叩いて柔かにしつやを出す作業が砧である。同時に麻の多く出る地が多摩である。

狛江は

日本では高句麗を「コマ」と云つるから、西暦六六八年に亡びた高句麗の重臣還臣が住みついた地として「狛江」が挙げられ

狛江郷の範圍

（今の調布市・三鷹市・武蔵野市川崎市の一部を含む一帯）

狛江の百塚。その代表的なものに狛江龜塚あり
五（六世紀）

滋賀県日野町小野の鬼室神社 神体は近江朝廷の宇麻呂（鬼室崇斯、律令制長官相当

朝鮮と日本との神社に於ける文献

- A 古事記の神代巻では同列に登場する曾富理（ナリ）
- B 宮内省の神社（平安朝）韓神二座 国神一座
- C 宮廷の神楽（無楽に重要な位置を占めている）
- 三 法草の法草寺 武蔵野国分寺、調布の深大寺等は皆渡来人に關係深いものである。

其の背景は、五世紀（）六世紀頃の興亡に高句麗敗れた亡命歸化人の二世又は三世時代に当る。

8 特に高句麗と呼称される者の中には、新羅亡命者も含むことを忘れてはならない。高麗も新羅も同一民に族し出雲族の祖先同一系であった。

西暦七世紀後半天武天皇六七三白鳳時代に互り天つ神國つ神を（二つ明らかになれ明治四年の社格に引継がれたが、弥生時代から天武帝までは民族毎の氏神を同一信仰の対象と

していた。日本の神々も他の神々も祀った。尚関東の神々で韓系のものは次の通りである。

- 一、埼玉県の日高町の高麗神社、高麗山聖天院
- 二、甘良（カウ）加羅（カウ）郡 だった。郡馬県内

三、吉井町（吉井町）日本三古碑の（多胡碑）

尚遺跡では秩父の和銅遺跡 其他千葉、茨城にも在るが後刻探究しなければなるまい。

四、神奈川県大磯が当地区の重要な港として取上げられよう。高麗国遺臣の上陸地として賑った所である。ここにも高麗神社や高麗寺がある。

麗寺がある。

更に箱根の陰を守る 箱根神社が渡来人達の祖先を祀るとさえ言われている今日、海から陸から陸統として奈良をはなれ関東へ移動した新文化人たちを想うとき正史に見えるのは誠にその一部に過ぎない事を想起せざるを得ない。歸化系移民の指定地区と見れば其の子孫の残した焼畑農法は近世の野火止の用水などと直結し周辺の方言に女慎系が混在しているのも不思議は無いだろう。依って古代より奈良朝終りまで定着した古朝鮮語は古事記日

本書記などを解明する重要な要奥となるだろう。五族協和文化研究所資料より。昭和十四年吉林省永吉県公署教育研究所内に置いた（五族メンバー）

この正史に対して私はこう考へたい

註(1) 凡らく周鑿校術は六九〇年に配置された新羅の帰化人が中心で後の高麗郡は他のものである。これを民族移動から見ると四世紀頃移動した出雲族と新羅系は同一種族で後の高麗系も同一種族である。(女眞扶餘、胸奴、韓朝、白鳥(沿海沿の北鮮系即ち高麗系)で大腔騎馬族である。又旧満族即彼人なども同系である。これら出雲族と言葉風俗習慣も甚相似突が多いと見られる。宣撫工作と交渉の常套手段である。而し防人官制は七三〇年廢止されてる所から約四十年間で現地人との磨擦が無くなったと解される。故に防人官一族もこの間の人物であると想定され古墳も同様と見る。

註の二 防人の上官 国造くにのみやつこ・県主あかぬしが大官 兄多毛比命(兄耶志国造・伊狄知道(胸刺国造)は前者は中央派遣の豪族で後者は地方豪族から起用された。豪の官職に附けられた名刺である。斯様に中央派遣と地方豪族の採用とで現地調整を図った状況がますますと浮んでくる。既に自然条件體系に人的条件積糸で継がれた地点として小崎沼やサキタマ、サナタマ、サイタマの地名を考察して見よう。

地名考

これについては県内の定説が出版されているが私は必ずしもこれと同調することは出来ない。

一言葉を漢字に改めると、言葉の「ギ」は「ナ」となる。その例を幾つか挙げよう。誤謬の経緯は(1)崎(崎はナである)山崎(その地概以下無数) (2)幾(幾はナ)汽鐘(汽車) 電氣(聖朝) 飛行機(山崎) この様に四声でアケメント、イントネーションの差があつても「ナ」とは文字記号では同様である。

(13) 下米案の「佐喜多力」は音を正確にとらえた
当字で理解者の筆とみる。漢音で「シム」
で意美なし

(「サマ」が本米の言「米」神空の意で「サ」地くした「公幸玉」)

それではサナクマはくらしの豊さの祝詞にのみ、
前玉は爲政者か、見た意味と文字に表現した
ものである。漢音では「前玉」で前線の豊かさを
示し、玉は先住氏族の宝である。それで行政
まつりごとの「前玉」とも解する。玉の語意は
神の靈で「サ」がサチとなつたのは漢字誤音
他「崎」と「崎」は自然条件か、見た名前で「水」が
地名の原塚とみるのは「雪」ではなからうか。
今仮りに、標高十三米、十米半、六米半、五米
一四米七の等高線と見て書けばみさき、半島
に現れる所がある。

以上の経過が何を物語るかを吟味して見よう
初めにことばあつて「先住氏族(高米系)文字を
持たない「サナノマ」が文化を持つ新進兵が漢
字にあてはめて「崎」が「崎」となり地形をも併せた
ものと思われ。従つて「水」は後世の事で
その中向に行政上の前線地として豊か所

と考え、「前玉」の語を充てたものと思われ。
註、関東以北について中央政権はどの位浸透
していたかで見よう。紀元六六〇年に東國に
百濟の帰化人ニックク年を根住させているが
この東國とは関東と解される。理由は即ち
七四〇年初めて大野東人が奥州征伐に出た
る。(仙台山形一秋田)多賀城(いわね城)
遠征で東北道の百濟帰化系は考えられない。
ここに前玉がある。

民族政策

大和朝廷も百濟系を畿内殿中を
中心に地方は騎馬族系で風俗習
慣並言葉と同じくする出雲系にまね

この時代は地域的に先住民族の雑居と統一
國家に近い大和朝廷支配の種族(高米系)は
出雲、蝦夷の一部、上層部は帰化系ニ統一は
山東を根拠地とする漢民族渡航して百濟經由
の文化人とその一族、他の一つは騎馬族で黄
河流域から大陸横断して山海間より南西奉天守
東經由の高麗、新羅系涇海州の白鳥(羽人)

一四一
で例の盛京シギン、中京ンガン、東京城トシギンシヨウと築城した女恒系
である。

殖民地経営の一手手前て体面を保持したか
渡来民族の優位さは認めざるを得ない。越か
原住民族代表は出雲系で出雲平定当時の不平
の甚で捕縛を強うされて民族と抑え主流環
境を奪ひつた地方に分散した地方に君臨し
た部族なのである。此の状況下に在って第一
為政者は武と言葉の宣欄、才ニは文化技術培
尊才ニは文化堂内で、これと具備した役人と
部下が命を受け在地に赴く。今の転任者と
は趣きを異にするのである。皆一國一城の主
人として一族部党を率き連れ住定の要素と多
分に持つのである。

前記の地とて例外ではあるまい。又注目す
べきは前の百濟系が言葉と風俗名物の異いで
後の高麗新羅系支配者と交習させるを得なか
ったと見られる。其の記が「新羅族出身の武臣
豪族の發見につながらる。

の音訓を主として時代と考察して来たが、
最後に、

出土品・其の他

一 古墳の物語ももの、六世紀頃か定義とさ
れていくが、あの古墳は皆同期と考へたくない。
少くとも三、四世紀三世紀の用きと感得す
る。水塚ある古墳は四世紀後半と決定する。
理由 出雲族の根拠は白うサキとワニサメの合
戦前後で云々神話時代である。定着した
のは一世紀、鬼野文化は持たないが部族國家
の形態は四世紀頃と見る。文化を持たないも
のは征服される。それか六世紀から七世紀と
見る。

敗残者の尸史は残らない。出雲族がこの地に
残したものは「祭」のみである。宗族の祖墳
祭と時の現人神ウツミカミと祭る神社「サマツマ神社」
のみである。出雲系が衰退し帰化人一統が文
化を以て残されたのかこの古墳発掘である。
随って今日問題とされていくものは概ね

「勝利者」の尸史に外ならない。勝戦地は
注目するが平和裏の退却に気付かない。退去
は山岡地又は遠地への移住と云々地は野化人
に明け渡したのであらう。同族行政のトウ石

の経緯は伝わらない。

只前玉神社の神宮の説明にもと平地に仕、た神社と頂裏け古墳であつたと思われ、その後で高台に移されたようだと説明されてあつたか、私に只移つたとは思われない。

▽ 先に浸水カおろしを説いたが、これは第一二次意義で実はもつと大きな理由があつたとおもわれるのである。

現人神 (女系) 巫女の御宣託なくして男は決定出来ぬと思想が征服者も被征服者も共通観念に立つ

この貝地は立つて被征服者の祖先の霊と従ふ高台は征服者(文化系移民人)がこの墳墓の地に下方の神社と移し祀つたものと思ふ。出雲族の悲劇の跡と解したい優位者側の勝利記念ともなる。

はにわ及その他の発掘品の物語るものは

一馬... 民族移動(馬馬)大陸經由の北鮮から渡来した系族の記として戦跡形体も変つた項

二、人物... この五つの相は三ツ(原住民中ニ)

左側は移民人の相右は現地の混血児の相と観る。ニ世ニ世

三、其の他の出土物を分類して考察すると生活用具、戦争用具、装身具などとなる。

1. 生活用具を二ツに分け、銅植物捕獲採集用具、一は政府戦争用具と見られるものがある。他の一ツは台前用としてもの

2. 政府戦争用具として前述の馬と馬具の発達が観られる。他に刀剣類の発達が目立つている。

直りから近代刀剣への第一歩として刀身のそり方と刃のつり方をみるのである。

3. 装身具に至つて既に美術品とするにふさわしいものまで陳列されている。四、手鏡外

この出土物を古墳の位置別にすると当時の階層別が明らかになるのである。一度の視察では時間不足りなく概論的にすることを承

さされたい。

只、ぎょうだの文化財と掲載の分から抽出する

す

一 丸薬山 平地 高16 直徑100 日本最大

標高17 現存丸巻 弘武蔵国道の墓

二 水鳥埴輪 万葉丸 見武蔵小島沼野と

題 前玉之 小崎沼野 鴨曾其務 巳

尾爾零道流霜子 掃翁有斯

さきたまの小崎の沼に鴨を羽さる巳が尾

にふりおけしをも けらうとにあらしし

の雅人行連

。折軍山古墳

直視寺古墳

古鈴 小鈴 杏葉

国立博物館蔵

。八幡山古墳 若小玉に在る 小針沼埋

立工事の時 石堀 緑泥片岩と母山岩

巨大なもの

。直視寺古墳 前寺後円 惣長110 前寺中

鉄父石の緑泥岩 後円部高5m 後内郭二室

。理蔵塚古墳 若小玉 中村地已 景祐定

高5m 墓底部径18m 南面 羨道部(長)

奥壁、天井石は緑泥片岩の一枚石

側壁 室山岩 厚い粘土の堆積式

側壁 室山岩 厚い粘土の堆積式

参考 支那と日本人と支那の尺

1. 支那尺 1尺 = 日本の1.1尺
現行尺 1m = 支那尺の3尺
2. 支那1歩は日本尺で6.6尺 平方
2.7m x 2.7m 共に6寸位の誤差がある
3. 径100mは支那尺50周 丸薬山 16周 8周地筑塚

其他 測定部からかうので比較出来ない 比較(7も無意味)

併而寺院建築の柱と柱の間は5周で又は1周半房より出ている
人の住居は1周房と云う。それと之を1周とした。

日本尺で9尺9寸に当る 支那の9尺也

。支那の1里は日本の6町 日本1里は支那の
6里にあたる。距離

原始絵画

石室の修理工事で発見したと。

以上 此二篇の検討して見たら、最後には注と要するものが、若小玉、中村史に、
 又(某指定)地蔵寺古墳の「厚い粘土の堆積式に注目し、これはない、私は思う
 原稿定でなく、国語定して符存さるべきである、

理由

厚い粘土の堆積とあるか、是は只粘土の自然のものではない。今のレンガに當るもので、保土、保運に必要の住居に比すべき墓にのみ使われるものである。

予ニ 此れは一時保存所に當る所、永久墓地として、かく、この地と引取、て、子孫が故山(墳墓地)に帰る(機会を見て)この墓道所から柩骨箱に入れて祖えと共にふるさこへ帰る、である。

この思想は支那特有のもので、盛宣も埋葬は其のまま、残すか人骨は残さない。山東人の風習である。「予ニは某道部とたいてい、とあるが是は當然である。命日及後卷の時、直接柩の側まで行って柩骨をつり花を植へ道

まれば、そのものである。内記は一段高くし、ひざまづく、小庭がその前方にあるのが常である。この大ささか、見ると、高さは5、二回半、底部十八米(七回)とは同族者今も兼ねたもの、柩中何半か、三、から何人分とは云え、た、か、小人数のもの、と指定される。普通横一本縦二本か、一と分と算定してよい、防湿防湿腐敗の悪臭と除く、か埋積式の持数とされる。

注

この見解は東京城址と鳥地街址比定の爲に、吉林省へ和州博士が立ち寄り、北、南、東、西、四方砲台山鹿の墓池について、話し合、て、其の後数月経て、漢人の(友人同僚の父死亡)一、墓儀考列にて初めて、内記構造を参観した、経験から指定したものである。

此の古墳の物語も、ものけ、爲、改、者、の内の一族中に、帰化人(山東系百濟經由、大和朝廷に入、つて、)國造か、原主に、任、じ、た、人、が、い、た、)の、記、で、あ、る、

随つて若し百濟經由の移民人の跡があるとするれば、紀元五六六年百濟人ニッソッ人と東國に配置すしとある正史は此の前者地を以てあつたとして解せらるゝので前記述べた前編系といふ四年の同さがある。それで別題は二つある。先行民の相克、恐甚しい崩壊已試て行政措置と出づ。これにて整回リ順序と發展經過もぼんて来るのである。愈行田市の古墳は興味を呼ぶ。

ひ 下 び

行田市の古墳群は独り行田市の問題ではない。埼玉県全体の問題として否、武蔵國として兼國は拡大されようであらう。

東國にありし前線その他としての価値
開拓行政上の大和朝廷の宮庫として
民族融合としての試練場として

是が平安朝の平将軍を以てする豪族割據の例も、武蔵七党の生じた意味も、或は又源氏族

扱けを初め古河公方も、南北朝時代の武将も一連の同連の中に浮んで来るのである。それ以後世の歴史を飾るものであるが、当面の古墳自体に於ての課題も二人に同一地を以て判明する所は少いであらう。

(一) 古墳

- (1) 折軍家の水塚
- (2) 丸墓山の埋藏品
- (3) 地蔵塚の美道町之瑞穂式古墳

(二) 民族

- (1) 豪族起用 中興の遺者と地方豪族起用
- (2) 開拓令と豪族一統團案祥の理由
- (3) 民族移動の情況

(三) 文化

- (1) 地名の意義とあり
- (2) ことばと文字の記録

三、四の甲とバスがゆく。一行は佐同
所い、先歩にして観察す。砲砲と一ちかる

坐向と眼に遠く果して鉄砲山あり古墳ときく
（徳川期の名残と止む）をりして丸墓山、徳行

山、樽軍山を右に見て水邊に注目す。前玉神
社に詣す。サイノマの發祥地と神主は語る。

初め平地にあり、今は台地に浅間神社併祀す
と。初めこの地に沼あり荒川が這くと、舟

場もあり水運の便ありし事を理由もなく伝承
をかたりつぐ。

最後に發掘品を資料館に見る。

時間不足に分類し纏めるには余りにあわただ
しく、秋紅葉を視るから再びバスの人となる

一行三十有余名極めて意氣深し、

見学して想ふことを記し、今後に提示して

摺写す。識者の一はみみずのたわじと、一笑

に付すたろう。又他の一識者は耳をそばだて

て再調査に踏み切らやも知れぬ。敢えて私は

私なりの調査の歩を進めるのみ。

批判は後世に残し、上記(一)(二)に果中さ水新

しき方向を生み出す努力が更にこの地の価値

を高め只一つの學問となることを信ずる。

メモ

Large empty rectangular box with a dotted border, likely for notes or a diagram.